

全国中国語教育協議会

ニュースレター

第12号

1999年9月9日発行

99年度後期セミナーの受付を開始(第4面) 年度内(3月予定)の大会開催に向け努力

今年度の前期セミナーと夏季セミナーは予定通り終了した。どうやら赤字を出さずに済み、後期セミナーに進むこととなった。今年度は、参加者に意見表(質問表)の事前提出を求める等、講師からの一方通行にならないよう配慮した。この方式はなお改善の余地があるものの、一定の成果はあった。セミナーを東京以外でも開催するという懸案は未解決だが、講師を各地から招くことは徐々に広げたい。セミナーの報告は次号以下に掲載する。

会則で隔年開催となっている大会(研究会と会員総会)は、今春の理事会とアンケート調査での意見を汲むかたちで、ギリギリ年度末(3月最終週)の実現を目指しているが、今後、理事各位とも意見を交換し、ご案内を次号ニュースレター(11月末~12月初)に掲載する。

✍ 全国中国語教育協議会 会報・研究ファイル 原稿募集 ✍

会員による積極的な投稿をお願いいたします。執筆要領は下記の通りです。

- ☆ **会報掲載原稿** ①教室での工夫・授業のアイデア ②教学実践記録(教案等も含む) ③国内外の中国語教育・研究関係学会・研究会・シンポジウム紹介 ④私の読んだ本(外国語教育の分野で、紹介・書評とも) ⑤その他、会報にふさわしい内容の原稿。
1編1千字以内。ワープロ使用を原則とし、手書きの場合は400字詰め原稿用紙使用。締切りは特に設けない。採否は事務局一任とし、随時掲載。原稿は返却しない。
- ☆ **研究ファイル掲載原稿** 「研究論集」公刊には原稿審査から印刷まで種々の問題が未解決のため、当面は会報(ニュースレター)に添付する形式の「研究ファイル」を不定期に発行の予定です。投稿希望の方は、執筆要領を事務局にお問い合わせください。

会費納入のお願い

本会の経費は年度会費2000円と有志の寄付金によっています。今年度会費をすでに納入済みの会員には、ご協力に感謝しております。

納入が遅れている方は、前号会報とともに送付いたしました振り込み用紙で、至急お振り込みをお願い申し上げます。

事務局のご案内

156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部中国文学研究室内

全国中国語教育協議会

郵便振替口座 00120-0-364168

なお、お問い合わせ・ご連絡等は、お手数でも郵便でお願いいたします。

ドイツ語圏中国語教育協会



中国語の教育や研究に関する学会・研究会をはじめ、施設・機関などを順次紹介する

この夏、第6回国際中国語教育シンポジウムの開催にあたり中核となった団体が、この“**徳語区漢語教学協会**”である。同種の組織はフランスやアメリカにもあるが、積極的にしかも学術研究に力を注いで活動している点で傑出している。1983年に中国語教育の状況を改善する目的でドイツ連邦共和国(西ドイツ)中国語教育促進会の設立が発議され、その後88年に現在の名称になった。会員数は110で、ドイツ語圏(ドイツ・オーストリア・スイス)の中国語教員と学生、言語学・言語教授法等の専門家、翻訳・通訳の従事者で構成されている。会則に、ドイツ語と中国語を母語とする人びとの相互の友好を深めること、中国語を中学高校の外国語科目に加えることなど、ユニークな目的がうたわれているが、主たる任務に、当然のことながら、中国語教育の普及と向上、教授法研究に向けてシンポジウムやプロジェクトの設定等をかかげ、隔年にシンポジウムと会員総会を開いている。シンポジウムでは毎回所定の主題に沿って討論と情報交換が行われている。筆者(輿水)は、92年10月にハイデルベルクで開かれた第7回に招かれたが、メインテーマは「基礎課程につづく中国語教育」で、日本における中級段階の教育内容を報告するよう求められた。この時は中国から呂必松教授ら複数の専門家が招かれただけでなく、筆者を含め主要国から報告者が招へいされた。今回の国際シンポジウム開催と同じく、公的な基金からの援助をはじめ、ドイツの中国語教育に対する意気込みを強く感じたものである。シンポジウムは79年以来、開催はすでに10回に及び、次回は2000年秋に「中国語教育における文法体系」を研究テーマとして開くという。

このように事実上、国際的規模のシンポジウムを開催するほか、小規模の討論会や研究会も開き、特筆すべきは中国語教育の専門誌として『春』という定期行物を84年以来、すでに15号公刊していることであり、さらに単行本の出版活動も進め、たとえば中国語言語学双書というシリーズ物は8編を数えている。その内容も辞典あり、文法研究あり、教授法ありとバラエティに富んでいる。また、この協会は中国の関係組織との連携に力を入れ、「漢辦」の略称で知られる中国国家対外漢語教学領導小組等とも連絡を密にして、ハノーバーに設立されている中国センターとともにドイツでのHSK実施に協力している。

現在の会長はマインツ大学の応用言語学部部に所属するProf. Dr. Kupfer(柯彼徳)で、氏の精力的活動がこの組織を支えている、とあって過言でない。同教授は国際中国語教育学会の副会長でもある。筆者は10年も前に初めてドイツの地を踏んだ際、勤められるまま宿をお借りしたところ、子ども部屋を空けてくださったので恐縮した思い出がある。ライン河一帯の観光までお世話になったが、96年に北京から東京まで足を延ばしてくださったので、拙宅に来ていただいた。各国の専門家と同氏を訪ねた者は少なくないと聞く。(輿水優)

協会連絡先:Fachverband Chinesisch e. V., Postfach 1421, D-76714 Germersheim GERMANY

第六屆國際漢語教學討論會(99. 8. 8~12) 印象断片

このシンポジウムは3年に1度の開催で、1985年の第1回以来(第2回は世界漢語教學学会創立の87年)、発祥の地であり、事務局の所在地でもある北京で開いていたが、今回はじめて中国以外に会場を設けることとなった。実はドイツの理事からは以前にも開催希望が出たのだが、その時は資金の問題で実現しなかった。今回、2000年にハノーバー市で開くE X P O (万博)のP Rといった要素もあったものか、地元の州・市等の自治体や基金の援助が得られ、開催に至った。ドイツの負担で中国から40名の代表を招いたほか、従来通り外貨事情の困難な国にあげている。日本は第も費用の提供をしたようだ。これだけでも相当の負担であるが、現一の標的として、現在地に着いて驚いたことは、事務局の人手が決定的に不足で、主催者も目されている。次回側の総責任者であるProf. Dr. Kupfer自身が総指揮から雑役まで目まは2002年に香港の予定ぐるしく立ち働いていた。北京開催の場合は語言学院(現北京語言文だが、8月は台風の時期化大学)の教職員が総出の運営だが、受付や案内に中国専攻の若い人で心配と、香港の理事。たちが10人もいただろうか。そのためか、北京の事務局が相当のお手伝いもしたようで、

余聞 運営責任者の大会プログラムの構成や進行は中国で開くのと変わりなかった。Kupfer教授は500kmのというのも、かねてドイツの理事はヨーロッパ開催で、遠い中国に道を自宅から、ブルー行けないヨーロッパの専門家が参加できる上に、学問的水準が高まバード・ワゴンに郷土る、といった主張をしていた。率直に言って、私自身はこの会の聯ラインランド・プファ歡会的側面より、分科会で朱德熙先生が中国の若手を叱咤する雰囲気ルツ州産の、葡萄の美気が好ましかったし、92年秋にドイツ語圏のシンポジウムに招かれ、酒を満載、ドイツ側の朝昼晩と討論のつづく様を見ているので、今回のドイツ開催に期待招待会でふるまった。するところが大きかったため、いささか失望した。ヨーロッパ各

国からの出席者も意外に少なかつたし、人手不足で当然とは言え、分科会の司会進行は旧態依然の中国式で、私が報告を割り当てられたセクションでは**余聞** 私自身のことで恐縮6名の報告者の半数が欠席、1名は代読、実質2名で90分となるだが、修飾成分の位置につはずなのに、司会者(中国)が出欠を確認せず、ひとり15分の制限で話させたため3人目の発表に延々と質問をつづける羽目にならなかつた。資料の配布もコレクター(?)に持ち去られ、会場で聞日中の違いを話した。1人く者が入手できないという例も多かつた。ただ全体会で質問と討に制限された質問者(中国)論のできた例があつた(次の司会者は困惑)のは進歩であつた。から方言なら日中同じだと、つまらぬ指摘でがっかり。

大会は従来通り5日間に及び、初日と最終日午後に全体会、つまらぬ指摘でがっかり。中間に1日市内見学が入つたほかは分科会で5組に分かれた。聴衆を多く集めたのは、第**余聞** 遠路、ヨーロッパまで4組で、中国語あるいは中国語文法が主題のため、とくに北来たということで、会期中の京大学の陸俊明、沈陽お二人の報告の際は超満員であつた。小旅行に抜け出す者が多く、陸氏は“動詞后趨向補語和賓語的位置問題”というテーマで、分科会の出席が減ることはこれは一昨年の本会夏季セミナーの際に、事務局から提出し、ともかく、プログラム変更のお話いただいた問題である旨、会の後で耳打ちされた。陸申し出まであつたとか。人気氏は初日の全体会でも中国語教育は盛況だが、基礎理論や基はベルリンとハンブルグ行。礎調査が焦眉の急であると、訴えられた。【P.4につづく】

99年度教員セミナー(後期)のご案内

99年度後期も、土曜日利用のセミナーを10～12月の各月第二土曜に実施します。前期と同様に、新しい試みとして、これまでのような講師からの一方通行を排し、出席者からも発信可能な方式を採用します。詳細は下記要項をご覧ください。なお参加は会員(教歴の比較的浅い方を特に歓迎)を優先いたしますが、会員外の方々にも積極的な参加を求めたく、会員各位には周囲へのPRもお願いしたいと思います。参加が定員の70%以下では、会場の提供があっても、赤字になりますので、ご協力ください。

99年度後期セミナー要項

☆各回の日程および研修テーマ(仮題)と講師

- (10月) 10月 9日 (土) 朗読のポイント(読み方実習) 東京外国語大学 孫玄齡 氏
各参加者の読み方をチェックし、朗読のコツを伝授
(参加者には事前に課題文の朗読を練習していただきます)
- (11月) 11月13日 (土) ガイドラインの設定に向けて 日本大学 輿水優 氏
既刊「高校中国語教育のめやす」を対象に“教学大綱”を考える
- (12月) 12月11日 (土) 中級段階の中国語教育 東京外国語大学 小林二男 氏
読解力の養成を中心に、中級レベルの教授法を探る

☆時間割りと会場

各回とも研修時間は、午後1時半～4時半(1時10分受付開始)。

会場は従前通り(財)国際文化フォーラム会議室(新宿駅西口、新宿第一生命ビル26F)

☆申し込み方法 葉書に参加希望の月と、氏名・連絡先(住所)・所属・中国語教育歴をお書きの上、事務局へお送りください。定員各35。申し込みは直ちに開始し、定員にて締め切ります。折り返し、受講料の振込用紙と質問表(または課題)を郵送します。受講料は1回=¥2,500、2回以上の一括申し込みは2回=¥4,500、3回=6,500です。

各回ごとの申し込みは、その都度¥2,500となります。(受講料事前納入をお願いします)

☆参加者にお送りする質問表(意見表を兼ねる)等は原則として半月前までに回収し、セミナーの内容に反映させます。また当日は参加者が発言する時間も設定します。

【P.3からつづく】今回、主催者側に送付された論文(概要)は約280にのぼるといふ。しかし、玉石混交であることは否めない。中国国内は、会員についても助教授以上、大会提出論文には審査があると聞くが、実態はどうか。国外に至っては、なんでも受理という実情であるから、「討論会」が“名不副實”になることは否めない。今回、ドイツ側が「21世紀の中国語教育」という主題を掲げ、「中国語を20歳から学ぶ言語にするな」とも主張していた。その目標にどれだけ迫れたのか考える必要がある。論文はなんらかの事前審査を経るべきである。全体会の報告は委囑ないしは招待、入賞等の論文に限ってはどうか。

最後に関係データをあげる。今回の出席は38カ国、400人弱、中国は招待40、国費90その他、香港は約40、日本は50人弱、アメリカ30人弱。なお世界漢語教学学会の会員は41カ国、934人とのこと。[おことわり]本会報では便宜上、中国文にも日本漢字を使用しました。